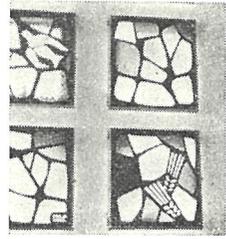


## 化粧品



### 随 想

鈴木 敬 一

夏がくる。苦痛でもありまた喜びでもある。苦痛はいわずもがな暑気である。喜びとは何か、これは若人のみが活動し、暑気の中で苦痛を自から受け取りその中で喜びを味わえる季節ということなのである。

海へ山へと操り出す人の多くは若人である。私は毎夏、大学のプールに数回積極的に足を向ける。夏は何といっても太陽であ

る。今夏も例にもれず学校へ水着を置き太陽光線の恩恵を受けようとする。脱衣室、鏡の前、頭髮に整髪料をつけ櫛を入れている大学生がいる。何げない光景かも知れないが、そこに私は現代をみるのである。一つは何か相容れない異質なものと、もう一方では出し抜かれたような同化していくものを感じてならない。いわゆる男子が人前で化粧してはすかしくないのか、ということと同時に私も若人はずだということである。

近頃新聞等で化粧品業界の動向をみるに男性用化粧品の売上げはうなぎ上りに増加しているとのことである。百貨店にあっても、従来、男性化粧品は女性用化粧品の中にあつてその片隅にひっそりと隠れるように置かれていたそうであるが、今日では女性用化粧品から独立して、一つのコーナーを形成している。またそこには常に男性顧客を見ることが出来る。業界も女性用化粧品の売上げは横ばいで、一にこの業界での浮沈は男性用化粧品の売上げ如何にかかっているとのことである。先発メーカーは昭和三十五年頃より徐々に新製品を売り出し

それをシリーズにしてまた今日では一社でも数種のシリーズものを用意して、年令、好みに合った製品を選択できるようにし、販売合戦に明けかけている。

因みに男性の化粧について日本の歴史をみると、まず土偶や埴輪で考古学的にみる事ができるが、その後あまり化粧はみられず、平安末期になり若い貴族の中で薄化粧をほどこすのが身だしなみとされるのが有史では初めてである。中世の武士では髭が流行し、そのためのかき髭がある。しかし世上一般化するのは江戸時代である。ここでは町人へも進展し髪、眉、というところの化粧が普及してくる。明治に入ると西洋文明の取り入れで化粧品の変化はあるが上流階級ではクリーム、チック、ポマードが使用されている。しかし女性の前では男性化粧品は表面化しないものであった。このようにみえてくると社会が安定している時代には男性も化粧をし、乱世では化粧どころか武勇がもてはやされたと考えられる。現代の男性化粧をみるにもう特定階級のみではなしに一般市民が服装、頭髮、顔と全身に化粧・美容が幅ををきかせている。企業

側もこの社会的傾向を土台にし、利用して利益を上げていく。現代の若者が企業のベースに乗っていることもあろう。しかし社会が安定し、消費生活が華美になったことは事実である。

歴史は大平の後には常に乱世があったことを教えている。男性の女性化などといわれているが、ただそれだけではあるまい。次に来るだろう社会が私には恐ろしいものと近頃よく考えるのである。だが一面私も若人である、高校生や大学生のように世間の風にも乗って行きたいとも考える時がある。

(商業高等学校教諭・商業)

## 北山講のこと

宮井 敏

もう五年も前のこと、御多分にもれぬ中年太りのおじさま達が一夕樹徳会館に集まった際、おのが腹の出っ張りのあまりのみにくさにいたく恥入って、一ちよう山登りでもやらかすべしということになった。名付けて「北山講」という。アルパイン・ク

ラブとか、商学部山岳部とか、ジャパン・エキスパート・ソサエティとか、何か、こう、もつとごつつい名前を、という声もあったのであるが、一寸かわったところで、というのでこれに落ち着いた。キャプテンを講元といい、メンバーを講中という。ミーティングが寄合で、当番幹事が肝煎りである。手はじめは、おそるおそる、キララ坂から東塔、愛宕から月輪陵、などと幼稚園の遠足みたいなことをいっていったものが、えらいもので、数年たつと、鈴鹿水晶谷から朝明溪谷や、大杉谷から大台原などまで行くようにもなったが、やはり主としては名詮自称、北山の山々谷々をたどるところが一ばん多いわけである。第一、七十キロ、八十キロというおとつあんから、院生の諸君や助手の先生方まで加わって来ると、当然オリンピックなみに徒らに高く登るよりも、参加することに意義をみとめざるを得ないわけで、そこで出席回数が問題となってきた、皆勤を続けてきた、商業史安岡重明が自然講元ということに落着いたのであるが、政権長期に及ぶと必ず腐敗すると貿易論の西口章雄がいい出した。禅譲

## 同志社時報 (No. 42)

時危思校祖

森地 正平

〈座談会〉

校友・同窓が語る“創立100周年”への展望 (1)

新島襄と理事功程 (2)

その他

えと文・随想ほか

(1部 100円・年4回発行)

せよというわけである。ことほどさようにわが北山講では講元の権限は絶大なものがあり、元来、スキー部長兼野球部長であり又体育会ポルト部長でもある出石邦保とい

えども、グラウンドの中、雪の上でこそ、威厳にみちて叱咤激励しているのであるが、一たん山へ入ると一ヒラ講中に過ぎず、講元の指揮統制に服さざる得ないわけで、いやそのみならず、部長としての自信すら喪失するものなのか、現に昨年の大台原行の時など、大台原で数十センチメートル転落して、あわやを思わせる場面があつたりしたものである。ところでこの北山講もはじめの中こそただひたすらに歩いてきたのであるが、何しろ、揃いも揃って無芸大食のところから、山うどを見ては喰えるといひ、せりを見ては一杯呑めるとにたつき、とうとう春先きの山ゆきのごときは山椒の木はないか、たらの木はないかということ、だんだん目つきが悪くなってきたやうである。「鶴の目、鷹の目」ではなくて「木の芽、たらの芽」である。実はこの、和えてよし、揚げてよしの山菜の王者たらの芽を紹介した大功労者は観光論玉村和彦な

のであるが、元来が本物の体育会山岳部の部長だけあって、シュラフを買う時に生まれたばかりの赤ん坊の分まで買い込んだというエピソードの持主でもある。

さて講元は来年在外研究と決まった。次期講元の政権の座をめぐって、ここは一波瀾を免れないところであろう。体育会角力部長でありはなはだ怠惰な講中であつた前川恭一に角力部長代行を押し付けられた貿易論が、このついでに代行はやりで商業史のあとをおそうか、それとも、ここは一つ商品学岩下正弘の線で手堅くまとめるか、いっそ思い切って新進気鋭の公企業論竹林真一で押すか、むづかしいところであろう。北山講も次回八月の例会伯耆大山ゆきで五十三回目になる。(大学商学部教授・英語)

### チヨークと黒板

野間 俊 威

夏休みも終りに近づくと、講義ノートを一ひっぱり出して後期の進路の検討をはじめた。たまたま担当講義が経済政策であるた

(三〇頁から)

の記念事業として完成させたいと思います。

大津 ちょっと一つお尋ねしたいのですけれども、百周年の記念事業委員というか、実行委員というか、準備委員のなかには、いまの在校の学生は入りませんか。いま学内とおっしゃたのは、教職員の場合ですか。

大津 そうです。

大津 現在の人が百年のときまでいるとは限りませんが、在校生の意見は何もお聞きになりませんか。九十周年のときはそういうことはなかったのですか。

秦 なかったのです。学生はグループが複雑でして、ちょっとめんどうですわ。というのは、各学校、十の学校全部に聞かなければならんということになりますし、大学なら大津でも、いろんな方が居って、聞くのに困るのです。やはり教職員が代表して見て、学内の意見を吸い上げておりますから、それでいいのじゃないかと思ひます。

大津 それでは、この辺で終りたいと思ひます。どうも長い間ありがとうございました。

(一九七二、四、二十八)

め、講義を「生きた」ものにするためにはアップデータな諸問題をとりあげていかねばならない。去年来の大問題は何といつても公害と福祉の問題であったが、そこへ今度はニクソンさんのおかげで「国益」というフリードリッヒ・リスト以来の経済政策論の根本問題を深く考えさせられた。

ところが、こうした諸問題——決して単なる時事問題ではないが——を講義に織りこんでいくと、当然のことながら原理面の解説の時間が不足することになり、毎年のことながら時間の配分に苦勞する。

そこで常に考えさせられることは、講義の能率改善ということである。従来は、学者たるものの関心は、講義の水準のみであり、カバーする範囲だとか、いわんや講義の上手・下手などを問題とすることは学者の風上に置けぬことだとされていた。いまでも多くの学者は依然としてそのように考えておられるようである。実際、自分の学生時代を振り返ってみても、本当に尊敬できる先生の講義というものは、無条件にひきつけられたし、講義からにじみ出る先生の学識の深さと人格に触れる思いであっ

た。

だが、すべての教授にカリスマ的な思想性を求めることは無理であり、受講者たる学生の気質も随分と変わった。講義に求められる最低限の条件はやはり、専門的知識の体系的伝達であろう。そうなると、知識伝達の方法・手段の工夫・改善も決して軽視できない。たとえば、狭義のノート講義（ディクテーション）は方法として最低であろう。極端にいえば、ノート講義とは教授のノートを学生がひき移す時間でしかない。その間、学生の頭脳は講義内容を咀嚼しえないのであり、まして批判的に検討する余裕などあるはずはないのである。したがって、教授のノートはあらかじめプリントなり教科書なりの形で学生が持っていて、少くとも当該時間の範囲は学生が精読していることを前提にして突込んだ解説を加え想定した質問に答える形の講義ができれば方法としては大きな前進であろう。勿論こういった方法を成功させるには、教授と学生の双方に相当な努力が要ることはいうまでもない。私自身、「封鎖明け」の頃教講時分試みたことがあるが成功しなかつ

た。現状では、むしろゼミナールで採用できる方法であろう。

講義の手段ということになると、この情報化時代にあつて大学（文化系）の教室ほど情報伝達手段において何ら進歩のみられぬ世界は他にないのではなからうか。まさに前産業革命的な「チョークと黒板」が支配している。逆にいえば素晴らしい「永遠の」発明品であつたであろうが、問題は一向に改良されないことにある。それどころか最近では「緑板」花して使いにくいこと甚だしい。チョークにしても、せめて煙草のフィルターなみに一端に紙テープを巻いたもの位あつてもよさそうなのである。

根本的には、黒板に頼ること自体に問題がある。複雑な図や表ぐらひはテレビの講座で使つていようなパネルを用意し、同時に受講者にもプリントして配布しておけば、講義の密度を高めるのに威力を発揮するであろう。教授の注文に応じて一、二週間パネルを造り、プリントを用意できるような教材作業課のようなものを設置することはできないものだろうか。

（大学経済学部教授・経済政策）